

# 今どきハイデガーを読むということ ——公共性の絶え間ない構造転換の中で——

高田珠樹

今回のフォーラム全体の題目が広がりをもったテーマですので、ハイデガーの作品のある箇所について自分の読み方や解釈を披露するというより、常日頃、ハイデガーに関連して漠然と考えていることを纏めながら、今日、私たちがハイデガーを読む意義などについて議論するきっかけとなりうるような話題を提供したいと考えます。

## 1) ハイデガーを語る私たちの「公共圏」

ハイデガーを公共性という概念に関連させて論じようとするとき、そこには、大学で思想や哲学の研究に従事する者が社会的にあまり認知されなくなっている時代に、ハイデガーを学ぶ意義を再確認しておきたいという願いが託されているように思う。

おそらくドイツでも実態としてはさほど変わらないであろうが、日本で、ハイデガーは主として大学で、あるいは何らかの形で大学に関わる者によって読まれている。その一方で、今の大学そのものの中でハイデガーを読む場、読んでいられる可能性は次第に狭まりつつある。もっとも、ハイデガーは、実際のところ、「大学界限」とはいえ、やや大学の公的な場から外れた場所、研究室の中や、大学に勤める者、大学に学ぶ者らの「私的」な場（カントならそれを「公的」と呼ぶかもしれない）でひっそり読まれ、時に大学の中に空間的な場所を借りて、しかし、大学の通常の公的な催しから外れた私的（あるいは公的）な催しの中で公的に論じられてきた。

研究者の自己理解はひとまず措くと、ハイデガーは、かつてドイツの文化や言語を知的に代表する同時代人として日本で受容されていた。第二次大戦後の世界がかつての連合国による米ソ両大国を軸に切り分けられ、西側ではアメリカ文化や英語が席卷する中で、ヨーロッパの文化は、新興の騒々しい都会の大衆的な文明に対抗しうる繊細な文化という位置を担わされる。ハイデガーは、コンチネンタルな文化の中の、ドイツを代表する存在として受け取られてきた。意識的・無意識的に関わらず、ハイデガーは、日本と親和的なドイツのナショナルなものを、あるいは、戦後の英米圏の文化を基準にしたインターナショナルに対するローカルを、土着性一般を代表する役割を担わされていたと言ってよい。ハイデガーがナチズムに加担したという事実が、日本では、アメリカやフランスにおいてほど大きなスキャンダルとしては受け取られていないのは、この辺りの事情も絡んでいよう。

また、大学の中での教養科目や第二外国語という枠が、ドイツ文学、広くはヨーロッパ文化の受容を制度的に保障する一つの擁壁であり、実は、ハイデガーを読みうる私たちの場も、それに守られていたと言える。戦後の日本でのハイデガー研究の層の厚さは、一方では、アメリカによる日本の大学への教養課程の導入や大学新設のせいで、人文系の研究

者の大学への就職機会が増えたという外的な条件に支えられ、他方ではアメリカ主導の世界秩序に対する違和感によって鼓舞されていたと言えるだろう。ソ連型共産主義には馴染めない若者にとって、アメリカ文化に対する有力な対抗軸、その象徴的な存在がハイデガーであったのだ。

八十年代末から九十年代初頭にかけて、それまでの冷戦構造が崩壊した。ほぼ同じ時期と言える九二年に大学設置基準の大綱化という中で、全国の大学は一斉に教養課程を改組、解体に踏み切り、教養科目の削減や第二外国語の必修が撤廃されてゆく。冷戦の枠組みの崩壊とインターネットの普及によって生じたグローバル化と呼ばれる大きなうねりの中、第二外国語の中のドイツ語やフランス語の位置は一気に低下する。辛うじて残っている枠も中国語や朝鮮語によって圧倒的されていく。環境や南北格差といった問題が浮上して以後、グローバル化の動きに対する有力な対抗軸として、日本の若者たちはヨーロッパ文化に期待していない。第二外国語も、しいて学ぶとすれば、むしろそういったグローバル化の流れにうまく乗るためのツールとしての可能性が期待されている。

報告者は、大学でドイツ語を教え、ドイツの現代社会の動きについて考えるような授業を担当してきたが、そういう中で、次第にハイデガーという名前が占めるべき位置がなくなってきたと感じさせられている。われわれがハイデガーを受容する前提、それを論じる場、一種の「公共圏」、というより「公私の狭間」のような場が、ごく素朴な意味で変わりつつあるのだ。

## 2) ハイデガーにおける「公共性の構造転換」

「公共性の構造転換」という言葉を表題につけたのは、もちろんハーバーマスの初期の代表作のタイトルを拝借したのだが、ハイデガーと公共性を語るのに、これを借りたのは、常々、ハイデガーの『存在と時間』も、いわば「公共性の構造転換」という構造を備えていると考えていたからである。

『存在と時間』の既刊部、つまり還元・構築・解体のうち、いわゆる「還元」の部分は、確かに人間の在りようとしてまず「世界内存在」を取り出し、それをまず気遣い(Sorge)へ、ついでそれを時間性へ還元し、さらにそれが歴史性として具体化されるという展開を辿る。しかし、この過程は単に「客観的な分析」として提示されているのではない。現存在にとって、気がつけば自分が常にすでにそこにいてしまっている世界、それが開かれている様態、これをハイデガーは、Öffentlichkeit、つまり公開性、一般的な訳語を使えば「公共性」と呼ぶ。現存在は、常にすでにこの公共性の中にあって一定の役割を担って世間的な生を生きている。そういった世界の在り方は、当初、ニュートラルな形で分析されているかに見えるのだが、だんだん、それが頹落だ、平均的な凡人だと呼ばれ、公共性の中で話すのは単なるおしゃべりだ、という具合に、否定的なニュアンスを帯び始める。ハイデガーは、そこにあくまで価値判断は入っていないと言うのだが、どう考えても、何か怒られている感じがする。現存在としては、なぜ怒られるのかよく分からないのだが、その現

存在に、やがて良心の呼び声が襲いかかり、お前は「負い目を負っているのだぞ」と呼びかける。その声に促されるように、現存在は、死への先駆に駆り立てられる。簡単に言えば、死ぬのを先取りする形で決断する、それを通じて自分がかけがえのない存在であることを自覚して、あらためて今、自分のいる場に立ち返り、そこに作用する開示性を、先人たちから託された遺産として背負い受ける覚悟を決める。それは現存在が一個の運命となることであり、これによって同時にまた民族の共同体が歴史的に生起する、と言われる。

要するに、われわれが普段何気なく公共性の世界に生きている、これを、良心の呼び声を通じて、一旦、シャットアウトして、一人の個人としての自分の在りように立ち返る。死を介して、自分はかけがえのない者だという自覚に目覚める。そのまま私的な世界に閉じこもり続けるのかと言えば、そうではない、あらためて公共性の世界に立ち返り、単なる上っ面の公共性から、その根底に作用する真の開示性を背負い受けるという段取りになっている。公共性とは、もともと、先人たちによって、ひとつのアレーティアとして開かれながら、それがいわば自明のものとして固定化してしまい、そこに備わる本来の異様さ、凄みのようなものが隠蔽されている。現存在は、その自明性から距離を取る。その言わば一種の異化作用を介して、沈滞した日常の公共性もがらりと様変わりした相貌を呈し、アレーティアとして立ち現われてくる。公共性からいちど私的な世界へと引き下がり、そこからあらためて公共性に立ち返り、それがアレーティアとして背負い受けられ、清冽な民族共同体となって生成してくるのである。

その意味で、『存在と時間』とは、魂の転回の物語、公共性がアレーティアの開けとして顕現しつつ構造転換を果たす、「公共性の現象学」なのである。

### 3) 現実の「公共性の構造転換」の中で

『存在と時間』では、本来の歴史性を通じて公共性が真のアレーティアへと転生してゆくのだが、それは同時に現存在が一個の運命となり、民族共同体が生起する過程でもあった。つまり、ハイデガーにとって、公共性とは、現存在がいまだ自己と民族との一体性を実現していない状態なのであり、最終的にそれは共同体へと回収されるべきものだった。

周知のようにハーバーマスの『公共性の構造転換』は、近世初期の啓蒙の時代のイギリスなどで、有産の教養市民が私的な利益を越えて「公共圏」というものを立ち上げていったが、フランス革命や十九世紀における公私の境界が曖昧になって次第にそれが衰退してゆく過程を追跡している。本来の公共性に代わって議会制などのように、むしろ形骸化された形でそれが受け継がれ、二十世紀には、互いに平等な資格を持った者による自由な意見の交換などといったことはありえず、むしろ政党やメディアの発達によって、一見、民主的と見えながら、その実、多くの人間が直接には政治に関わらないシステムによって、公共圏が代替されていく、というのである。

ハイデガーにとっても、公共性とは、公開の語り場であり、基本的に一切を支配し決定しうるような場として見られている。それを近代が追求すべき未完成のプロジェクト

として考えたハーバマスとは対照的に、ハイデガーはそれを嘆かわしい空談の場として考える。いささか図式的ではあるが、近代が、神の死んだ時代、何か上ほうから決定を下してくれるものがなくなった時代、共同体の原理・原則が必ずしも自明でなくなってしまった時代であるなら、その時代の大きい欠如に耐えるものとして、その欠如から要請される形で公共性が出現したと考えることもできよう。その限りでは、ハイデガーにとってもハーバマスにとっても、公共性とは一種の宙吊り、中途半端な未決着の場、**offen**ではあるが、中途半端に**offen**な場、その意味で**öffentlich**な場である。

やや意地悪い見方をすれば、人はそういった中途半端な公共性の中で、何か全体的な経験に触れることはできない。ハイデガーの言う死への先駆とは、擬似的な形で全体的でありたいという欲求が充足される機会だと言えるかもしれない。この方向で読む限り、運命として共同体と一体化する、というのは、そういった宙吊りの薄明としての公共性に終止符を打とうとする行いである。

ハイデガーが考えた共同体、民族がはたしてドイツというナショナルなものであったかは、断定できない。少なくともそれまでのハイデガーの思索にはそういった民族的なものを感じさせるものはほとんど見当たらない。むしろ批判的な対決を通して背負い受けられるべき歴史の文脈はヨーロッパ、ないしは西洋の知の伝統と考えられていた。実際、第一次世界大戦によってヨーロッパとアメリカの関係は劇的に逆転し、戦中に出現したソ連や新興国日本に対する警戒感を含め、ヨーロッパが脅威に晒されているという危機感は、ハイデガーに限らず当時の多くのヨーロッパの知識人が共有していたものであった。しかし、たとえそういった偏狭なナチズム的世界観に直結するものではないにしても、ハイデガーにとって、公共性から逃れ出た先に、あるいは公共性が転換を果たした先に見えてくると考えられていたのは、自分とそれとが一体であると感じうる熱い共同体であった。それは、ドイツの民族共同体かもしれないが、ことによると、ヨーロッパ共同体、あるいは西洋と言う共同体かもしれない。ただ、当時、勃興しつつあったアメリカや、あるいはアメリカと共に西洋を挟撃しようとするソ連を含むようなものではなかったのは間違いない。

従来、私たちが、日本でハイデガーを読み、それについて論じる場合、そこでは暗黙の内に、両対戦を通じ、あるいは戦後になっても、かつての連合国側の主導によって形成された世界秩序に対する違和感が投影されていたのではないか。日本の大学、とりわけ国立大学の中での、ドイツ語やドイツ文学が占めていた特権的な位置の中で、ハイデガーはほとんど唯一の生けるドイツ精神の化身として、戦後の大学界隈の公共圏と私的空間の狭間を生き延びてきた、と言えるだろう。おそらくハイデガーが考えたのとは少し違った形で、私たちは彼とのあいだに成立するであろう一つの共同体を望み見ているのである。

しかし、戦後といってもすでに終戦から六十三年の月日が過ぎている。ハイデガーが亡くなったのが戦後から三十一年後の七六年、それからすでに三十二年の歳月が過ぎている。ハイデガーの生誕百年に当たる八九年、ベルリンの壁が崩壊し東西冷戦が終結した。その後の大きな変動は、われわれがハイデガーを読むコンステラツィオンにも、変化を与え

てきている。グローバル化の動きに対抗する形で、民族的なものへの回帰の動きは生々しい形で表面化した。地域や民族の自己主張は強まりつつある。かつて多くのヨーロッパの知識人が考えたヨーロッパの共同体が実際に形となり始めた今、われわれとしては、ハイデガーとのあいだに容易にひとつの共同性を夢想することはできなくなっている。冷戦が終了した今、アングロサクソンの公共性に対する違和感をハイデガーに投影するというわれわれのそれまでの巧妙な位置取りは難しくなっているし、そもそも大学の改革の動きは、そういった立ち位置を支える経済的な基盤を蝕みつつある。

また、ごく常識的な意味でわれわれを包みこむ公共性は急速に変わりつつある。やはり、冷戦下で構想されたインターネットは、冷戦が終結したあとに爆発的に普及し、われわれの生活に大きな影響を与えている。今日、公共性という概念について考えようとする場合、インターネットの中の様々な言説の交錯を抜きにして議論することはできない。ハーバーマスが論じたのとはずいぶん異なる「公共性の構造転換」を含む、現実のこのような種々の変革の中で、ハイデガー的な「公共性の構造転換」の果てにアレーティアとしての共同性を立ち上げるといった構図は、本来、それが期していたはずの全体的な見通しを与えにくくなっている。

ハーバーマスも、もちろん現状としての公共性を肯定したのではなく、むしろ啓蒙の時代のみずみずしいその姿を想起することによって、その精神の回復を期していると言えよう。そういった批判性に関する限り、案外、薄明の公共性を共同性に向けて転換させようとしたハイデガーの企図からはそう遠く離れていないのではないか。確かに、今日の複雑なインターネットやグローバル化といった「公共性の構造転換」の中で、アレーティアの発露に向けた「公共性の構造転換」を企図するのは、いよいよ難しくなっている。しかし、それ以上に困難になってきているのは、大学界隈の公私の狭間でハイデガーを読むということに、自らの場を巧みに見いだしてきた私たちの術策なのかもしれない。